

マゾ
修学旅行Mデビュー



濠門長恭

目次

第一夜	真夜中の大回転.....	- 2 -
第二夜	ピンクローター.....	- 5 -
第三夜	ロストバージン	- 15 -
第四夜	強制アルバイ春	- 28 -
後日譚	性春まつ逆さま	- 38 -
後書き		- 42 -

第一夜 真夜中の大回転

旅館に向かうバスの中で、あたしは憂うつにおちいていた。

去年の臨海学習では大声で寝言を連発して、同部屋のみんなから大ひんしゅくを買ってしまった。わざわざ録音してくれた子がいて……

「いやああっ！ 来ないでよお！ 助けてえっ！」

「魔力をちょうだいっ！」

「食らえっ！ ウルトラマグナム……！！」

元ネタは分かってる。オンラインRPGが、そのまんま。触手の大群に襲われて、あんなったりこうされたりして、最後には仲間から転送してもらったMPを一気に放出して、超特大の火球で触手を殲滅。を、夢でリプレイしていたというか。でも、あんなったりこうされたりは、実際のゲームではなかった（あつたらR18だよ）展開で、それを具体的に叫ばなかったのがせめてもの救いだったんだけど。

この歳になって厨二病なんて、精神年齢を疑ってしまう。

修学旅行でもやらかすんじゃないかと、憂うつってよりもパニック秒読み。

まさか、またRPGネタを叫んだりはしないだろうけど。もっとやばい元ネタがあるので、戦々恐々。

3年の小島大地先輩。いちおう、BF以上の相思相愛……かなあ？

学年ベスト10の秀才だった。なのに、1学期はジェットコースター。期末テストの結果が判ってすぐに、告られた。

「綿島さんのことばかり思って、勉強が手につかないんだ」

だから、つきあってほしいなんて。自分勝手と思うか、そんなにあたしのことを想ってくれてるんだと感激するか。偏差値60超えのルックス（身長は55かな？）と、資産家

の長男というアドバンテージを考えたら、後者に決まってるじゃない。これまでは勉強第一で、言い寄る子を片っ端から「ごめんなさい」してたんだから、優越感もあるし。

あたしも、あっさり恋に墜ちちゃった。というのに。夏休みにデートしたのは二回きりだよ。最初が映画で初めて手をつないで、次が海（日帰り）でファーストキス。そこでお預け。二学期になってから三回目のデートをしたけど、図書館だよ！ 当然、進展は無ッシング。

大地先輩は悶々を解消した（のかなあ？）ので、成績はV字回復。内助の功（違）ではあるけれど。あたしも別に焦ってはいないけど。このまま冬休みに突入して、受験にラストスパートで……合格祝いのプレゼントが、あ・た・し。かなあ。

欲求不満が寝言になったら、顔から火が出てモンスターじゃなくてあたしが燃え尽きちゃう。

なんて贅沢（だけど深刻）な悩みを抱えて、旅館に到着。各班五人で、二班十人が一部屋。トレーナーに着替えて夕食の後は、それぞれの部屋で、男子はリアルカードゲーム（トランプともいう）とかサバイバルゲーム（枕投げともいう）を繰り広げて、女子は当然だけど恋バナ。

だったんだけど。なぜか、あたしは早々に寝落ちしちゃった。

そして……

「いつまで寝てんのよっ！」

パチンと頬ぺたを叩かれて、目を覚ました。

「痛い、なにすんの？」

みんな制服に着替えてる。あたしを取り囲んで、冷たい眼差しで見下ろしている。

「なんで……ええっ？ いやああっ！」

そばにあったタオルケットを引つつかんで、身体に巻きつけた。というのも、トレーナーが脱げて、どころか下着まで無くて、すっぽんぽんだったから。

「なに？ どういうこと？ 冗談はやめてよ」

みんながグルになって、あたしをイジメてる。そう思った。

「ほんつとに冗談じゃないわよ」

美沙が、あたしの目の前にスマホを突きつけた。あたしが部屋のまん中で大の字になって寝ている画像。おっぴろげた足で幸奈を踏んづけてる。

画像がスライドして、あたしが身体を丸めて自分でズボンを脱いでるところ。三枚目は、部屋の隅でショーツを脱いでいるところ。四枚目では、下脱ぎでまた大の字になって、部屋のまん中まで移動している。五枚目は、部屋の角っこであたしを布団蒸しにして、その布団の両端に絵美と渚が寝て重石になってくれてるんだけど……六枚目では、あたしが足のほうへずり下がって、トップスが胸までめくれ上がってる。七枚目では、自分でジッパ一を下げて前をはだけて朋子に抱きついてたり。八枚目から十二枚目は、あたしを囲んで呆れてるみんなの中で、時計の針みたいに寝返りとか芋虫とか。畳の上をずりずりしたもののだから、ブラのホックがはずれて。

そんな調子で最後の二十枚目は、目が覚めたときの姿（すっぼんぼんで大の字）になっている。

それにしても、貧弱なヌード。あお向けのせいもあって、ぎりぎりBカップはささやかな丘でしかないし、ヘアが薄いから恥丘の盛り上がりが目立つ。開脚の中心は幅の太一本筋みたいで、具が見えていないのは不幸中のさいわいなのか、未発達を嘆くべきか。なんて、パニックを裏返して冷静に批評してる場合じゃない。

「あなたのせいで、みんな寝不足なんだから。このオトシマエは、きっちりつけてもらうからね」

「……ごめんなさい」

広い部屋いっぱいを使って大暴れなんて、信じられない。けど、写真があるんだから動かぬ証拠ってやつ。動く証拠を撮られてないだけ、ましかな。なんてふざけてるのは、冷静だからじゃなくて自暴自棄ってやつ。

とにかく、あたふたと制服を着て。それからトイレと洗顔と歯磨きと。ショックが大き

いせいか、頭がぼうっとしてる。

食欲がなかったし、今さら完食教育でもないし、朝ご飯は残しまくって、修学旅行の第二日目が始まった。

第二夜 ピンクローター

同部屋の九人は、眠たい眠たいってぼやきながら、はしゃいでたし活発に動きまわってた。熟睡を食ってたはずのあたしだけが、落ち込んでるのを割り引いても、頭の芯が重たいし、身体全体が地面にめり込んでくような錯覚につきまともわれてた。

だから、水族館の見学も海洋生物講座も、終わって見たらなんにも記憶に残ってなかった。後は、ええと……『修学旅行のしおり』を読み返さないと、どこで何をしたかさ思い出せない。

「反省材料に、画像は全部スマホに送信しといたからね」

美沙が傷口に塩とタバスコを塗り込んでくれたりもする。

意気消沈して、同じ旅館の同じ部屋で迎える二日目の夜。

トレーナーに着替えたあたしは、九人に取り囲まれて部屋の隅っこに正座させられた。

「また暴れられたら迷惑だからね。身動きできないように縛るよ。いいわね？」

美沙はあたしたちの班長だし、ふだんから梢とか百合絵とか幸奈とかに取り巻かれてるから、もひとりの班長は差し置いて当然のように部屋を取り仕切っている。

まさか二日続けて、あんな大立ち回り(?)を演じるとは思わないけど。あたしに拒否権は無さそう。

「……縛っていいよ」

そう言うしかなかった。

あたしは体育座りをさせられた。美沙があたしの手をつかんで、足首に引き寄せた。梢

が洗濯ロープで、手首と足首をひとまとめに縛った。かなり窮屈。この姿勢を朝まで続けさせられると、エコノミー症候群とか起こすんじゃないだろうか。

美沙が旅館の手拭いを持ってきて、まん中に大きな結び玉を作った。

「臨海のときは寝言が凄かったよね。その予防もしく。これを啜えて」

手拭いを口に突きつけてきた。

ちょっと迷ったけど。身体の動きを封じられたら、そのエネルギーが声になって出るかもしれない。なんて理屈の以前に。九人を敵にまわす度胸なんて無い。

結び玉を頬張ると、余った手拭いの両端で頭の後ろを縛られた。

「んん、おええいい？」

まともに喋れないけど、大声で叫ぼうと思えばできそう。そう思ったのは、あたしだけじゃなかった。二本目の手拭いで、口全体を蔽われた。

「んん、んんん……」

鼻から漏れる呻き声では、叫ぶこともできない。

体育座りを続けさせられると思っていたら、上体を後ろに倒された。あお向けになって両膝を立てた姿勢。すこし足を開いていれば、横に倒れることもなくて、体育座りよりは楽だった。

「それじゃ、今夜はさっさと寝るよ。寝不足を取り戻さなくちゃね」

美沙が部屋の明かりを消して。消灯時刻よりもずっと早く、二日目が終わった……はずだったのに。

あたしは、まったく寝付けなかった。あたりまえ。手足を縛られて転がされて、猿轡まで噛まされて。これじゃ、まるきりSMの放置プレイ。なんて思ったのがいけなかった。

エッチな方向へ連想が流れる。膝を立てて足を開いて——なんて、正常位ぼい。大地先輩に処女を奉げるときも、こんな格好をするんだらうな。考えると、じわあっと濡れてきたりする。まさかと思うけど、もしも大地先輩にSM趣味があつたりしたら、どうしよう。そんなことまで妄想してしまう。

どれくらいのあいだ、悶々としてただろうか。寝静まっているはずの九人の中から誰かが立ち上がって、みんなと離れて部屋の隅に転がされているあたしに近づいてきた。

「眠れないみたいね」

かすかな外の明かりで、声を聞く前にその影が美沙だと気づいていた。

「もしかすると、袖子で裸族なのかな。服を着たままだと眠れない？」

「んんん……」

ズボンに手を掛けられて、あたしはぶんぶんと首を横に振った。

「遠慮しなくていいよ。脱がしてあげる」

ズボンと一緒にショーツまでずり下げられた。

「あ、上もだね」

ジッパーを引き下げられて、前もはだけられた。ホックを掛けたままでブラジャーの下に手を突っ込まれて、乳房を強引に引きずり出された。

「これで眠れるかしら？」

あたしの顔を覗き込む美沙。意地悪く微笑んでいる。

あ、これって……性的イジメだ。だけど、美沙があたしをイジメる理由が分からない。ていうか。班分けは生徒たちの希望で決められてる。同じ班になりたい人の名前を三人まで書いて、エクセルか何かを使って最適の組み合わせを決めたはず。イジメてやりたい人の名前を、わざわざ書く……としたら、よっぽど恨まれてるんだね。一般論で、あたしのことじゃない……はずだけど。

「そっかあ。袖子は欲求不満なのかもね。だって、大地先輩がちっともかまってくれないんだものね？」

え……？ どうして、知ってるの？

玉砕した子の恨みを買いたくないので、自慢めいたことは言わないようにしてたつもりだったのに。まあ……廊下ですれ違うときなんか、ちょっと親密ぽく挨拶したりはするから、意図的に隠してたわけじゃないけど。まさか、キスが一回きりなんてことまでは知っ

てるはずがない。

「ちょうど、いい物を持ってるのよ」

美沙がポケットから得体の知れてる物を取り出した。ウズラの卵をふたまわりくらい大きくして引き伸ばしたような——ピンクローター。それも、標準サイズ(?)のがふたつと、もっと長いのがひとつ、リモコンにつながってる。

レディースコミックでもインターネットでも、見たことはある。レビューも読んでる。でも、使ったことはない。親と同居してたら、こっそり通販で買うのはリスクが大きすぎるから。

なので。性的イジメに対する怒りとか、美沙の意図とかはちょっと後ろに下がって、好奇心が前面にしゃしゃり出てきた。敵意を抱いてるらしい相手にアへらされるのは、生理的嫌悪があるけれど。

ブウウウウウンンン……

モーターの音が、意外と大きい。

美沙が小さなローターのひとつをコードで吊るして、あたしの胸に近づける。

「んんんっ……んん！」

あたしは好奇心を後ろへ蹴飛ばして、身をよじって抵抗した。性的に親しくない相手に、いきなりローターを突きつけられて、それを受け容れていてはプライドにかかわる。

「騒いだら、みんなが起きるよ。気づかれてもいいの？」

いくない。でも……ローターを使われてアへらない自信もない。

「梢、手伝って」

その声を待っていたんだろう。もうひとつの影が身を起こした。あたしの頭を両膝のあいだに挟み込んで、両手で肩を押さえつけた。

振りほどこうとしたら、ほんとにドスンバタンになっちゃう。騒ぎを聞きつけて先生が来たら、この場は助かっても学校にいられなくなる。諦めて、全身の力を抜いた。

ブウウウウウンンン……

ローターの先端が右の乳首に触れた。瞬間、全身に電気が奔った。

「んみゅううっ……！」

甲高い悲鳴が鼻に抜けた。

「んんん、んむううう……」

自分の指で刺激するのは、まるで違う。猛烈にくすぐったくて、無数の針でつつかれているような痛みもあって、それが混ざり合って——鋭い快感になる。

ふたつ目のローターが左の乳首に触れると、電気が共鳴して快感がさらに跳ね上がった。

「んん、んん、ううううううっ……！」

息を吐き出すばかりで、呼吸もできないくらいに悲鳴が迸り続ける。電気が身体の中で反射して、腰の奥に集まるような錯覚……じゃない。そこが熱く疼いて、熱湯が噴き出すような感覚があった。

このままアクメってしまうんじゃないかな。羞ずかしい。でも、アクメりたい……

ところが。不意に刺激が無くなって……あたしは宙に投げ出される。

「んんんん……」

この呻き声はなんだろうって、疑問が湧いた。もっと刺激してほしい——なんて、思っちゃいけない。理由は分からないけど、美沙はあたしをイジメて面白がってるんだ。もっとイジメてなんて、あたしは絶対に思っていないんだから！

「おねだりしなくても、もっともっと満足させたいよ」

あたしの心の揺れを見透かして、美沙が淫険に微笑んだ。

梢からガムテープを受け取って、ふたつのローターを乳首の上に貼り付けた。

ブウウウウウンン……

「むううううううっ、もぉおぉおぉおっ……！」

そっと触れていたときとは比べものにならない強い刺激。ほんとうに痛い。痛いのに、それ以上に電気がスパークする。腰の奥が熱く滾って、汗がにじみ出るのが分る。

「凄いな。びしょびしょだ」

開脚の中心を美沙の指がえぐる。

「ちょっとだけ、ご褒美の先払いをしてあげよっか」

美沙が三つ目の、他のふたつよりも長いローターを手を取った。ローターの先端が、股間に近づく。

あたしのクリちゃん、とんがってる。ずきんずきん疼いてる。そこに——ちよんっと、ローターが触れた。

「も`ま`あ`あ`あ`あ`あ`あ`あ`あ`っ……！」

電気じゃない。落雷だ。快感が爆発した。猿轡で封じられた口から、絶叫が迸った。

びくん、びくん、びくん……腰が勝手に跳ねる。

クリちゃんの皮をそつと摘まんでしごいたときのアクメの百倍も凄い。なのに、ここはまだ絶頂じゃないと本能が訴えている。もっと、もっと昇り詰めたい。

性的イジメでもなんでもいい。もっと強く刺激してほしい……

……また。パタッとローターの振動が止まった。

「続けてほしいかな？」

意地悪く聞かれても、反発なんて感じる余裕はない。こくこくと、あたしはうなずく。

「それじゃ、袖子のバージンをもらってもいいかな？」

え……？

と思ったのは一瞬。長いローターをバギナに挿入するって意味だ。

それだけは、絶対にイヤ！

大地先輩に捧げるんだ。そうじゃなくても（そうじゃあるの！）、異物に破られるなんて惨め過ぎる——と、考えて。じゃあ、他の男の人になら奪われてもいいのかって疑問が頭を掠めた。

ふうふう……

乳首のローターが、かすかに振動を始めた。ちよんちよんと、クリちゃんをつつかれる。もどかしいくらいに弱く。

「んんん、ん、んんんん……」

あたし、イヤイヤをしてる。刺激を完全に止めて欲しいのか、バージンと引き換えにア
クメらせてほしいのか、自分でも分からない。

「もう満足したから、おとなしく眠れるかな？ まだ物足りないのかな？」

かすかな振動が止まったり、一瞬強くなって、また弱くなったり。

そうだ。ローターくらいじゃ、処女膜は破れないかも。勃起したペニスに比べれば、ず
っと細い（よね？）。処女膜にも穴が開いてるっていうから……セーフじゃないだろうか。

自分勝手な憶測だと、それは分かっているけれど。もしアウトになっても、異物で処女膜
を破られたとしても、それはロストバージンじゃない。激しい運動で破れるのと同じこと
だ。そう思おうとした。最初のときに出血しないだけ……でも、それが大切なことじゃな
いだろうか。

身体が快感を求めて、頭がちっとも働かない。

「やっぱり、これが欲しいよね？」

ローターの先端がクリちゃんから滑って、割れ目に押し入ってきた。腰をひねったら逃
げられるかもしれないけど……あたしは抵抗しなかった。バグナに挿入されたらどんな感
じがするんだろうって好奇心も、無かったといえば嘘になる。

「ダララララララ……」

結果発表直前のドラムロール。その口真似をしながら、美沙が手を動かす。

ブウウウウウンンン……

小淫唇の内側をローターがつついて——これはくすぐったいのが九割。快感もあるけど、
電気が奔るほどじゃない。

つぶっと、凹に凸が嵌り合う感触があった。

「ギャチャン！」

ぬうううっと、ローターが押し入ってくる。タンポンとは桁違いの圧迫感。

「みいいいっ……」

ぴきっと、裂けるような鋭い痛みがあった。けど、一瞬だけ。

ブウウウウウンン……

ローターの振動が、肌じゃなくて腰の奥に伝わる。さっきの裂けるような痛みの余波に、くすぐったさが重なる。あんまり気持ち良くない（気持ち悪いってほどじゃない）。

ぐにと、ローターがくねった。

ぐにんぐにん……あたしの中で、美沙がローターをこねくっている。口に指を突っ込まれて、唇をあっちこっちに引き伸ばされるような、奇妙な感触。引き攣れるような薄い痛みと、身体の中を搔き回される不快感と……くすぐったさは、あまり感じない。

ローターの動きがだんだん乱暴になってきて。

ぬっちゃぬっちゃぬっちゃっ……

ピストン運動を始めた。けど、ピンクローターはそんなに長くないから、バギナの奥までは届いてないみたい。痛みもすっかり消えて、振動のくすぐったさがわずかにあるだけ。

乳首に貼り付けられてるローターが快感を注入してくれるけど。そのせいで、クリちゃんを刺激してもらえない不満が強調される。

「袖子って、実は淫乱だったんだね。もっとももっとって、腰を振ってる」

へ……？

うああああ。自分では気づいてなかったけど。腰をくねらせて、ローターに押しつけてた。

「みんなも見るだけじゃなくて、手伝ってよ」

えええっ……？！

いつの間にか。あたし達のまわりを、他の七人が取り巻いてた。見詰めてる。幸奈と渚は股間を手で押さえてるし、花音なんて右手をズボンに突っ込んでる。ので、すこしだけホッとした。今夜のことをからかわれたって、

「あんただって、それを見てオナってたでしょ」反撃できる。

なんて、なけなしの余裕は、すぐ吹っ飛んだ。

「わたし、明日から旅館の歯ブラシ使う」

どういふ話題の飛躍かというとな……絵美は自分の歯ブラシを握ってる。たしか、電動のやつ。

「これ、一発で昇天するんだから」

あたしの腰を挟んで美沙の向かい側に座り込むと、電動歯ブラシをクリちゃんに押し当てた。

「ま`やわ`おあ`やあ`あ`あ`っ……！！」

文字に書き写せないような絶叫が猿轡を突き抜けた。

がくがくがくと、腰が跳ねる。その動きで歯ブラシの毛先が粘膜に突き刺さって、鋭い痛みが振動して、ますます快感が大爆発する。

「も`ぼ`お……あえ……ああ、うういえええ……」

真白な光が目の前に広がって……絵美の言葉どおり、あたしは悶絶してしまった。

.....

.....

.....

.....

.....

ブウウウウウンン……

全身を駆け巡る電撃で、あたしは目を覚ました。

「ん`む`う`う`う`、み`やま`あ`あ`あ`……？」

あたし、まだ縛られてる。猿轡を噛まされてる。みんなが、あたしを取り囲んでいる。さっき悶絶したときのまま……じゃなかった。

百合絵があたしの乳房を揉んでる。幸奈が鼠蹊部のあたりを指でくすぐってる。花音が内腿を撫でてる。絵美はまた電動歯ブラシでクリちゃんをイジメてる。みんなが寄ってたかって、あたしをオモチャにしてる。

みんなじゃない。美沙と梢の二人は後ろに立って、意地悪そうに楽しそうに、あたしを見下ろしている。

さっきの続きじゃないと、じきに気づいた。いや、続きは続きなんだけど……障子の向こうがうっすらと明るい。夜が明けてる。みんな（たぶん）熟睡して元気ハツラツになって、もしかしたらピンクローターの電池も新しいのに交換して、あたしをイジメてるんだ。

悔しいとか、これからどんな顔してみんなと付き合えばいいのとか、感情はぐちゃぐちゃだけど、今のこの瞬間にかぎっていうなら……もっともっと、イジメてほしい。

「あゝあゝ、あゝみやあゝ……いやあゝあゝあゝあゝ！」

悶絶はしなかったけど。あっさりとアクメっちゃった。

.....

.....

.....

つぎに目が覚めたときには、ロープをほどかれていた。ピンクローターも取り去られていた。でも、まだ裸のまま。あたしは自分で猿轡の手拭いをほどいた。

みんな、とっくに着替えて。にやにやしなながら、あたしを眺めてる。くすくす笑ってる。淫乱とかマゾとか、そんな声が聞こえてくる。

縛られてたのは関係ない。誰だって、あんなふうに刺激されたらアクメっちゃう。ちゃわないとしたら、不感症だ。

だけど、ほんと。合わす顔がない。ので、部屋の隅に放り出されてる下着とトレーナーをつかんで、洗面所に逃げ込んだ。

「あと十五分で朝ご飯だよ。早く支度しなさいよ」

美沙の声が追いかけてきた。美沙は班長だから、急かして当然だろうけど。それだけじゃない悪意が感じられる。なんて詮索は後回しにして。

とにかく、シャワーで股間を洗った。悔しいけど、タオルにうっすらと血がにじんだ。処女膜、破れちゃったんだ。でも、処女膜の有無はバージンと関係ない。だって、まだペ

ニスをつっ込まれたわけじゃないんだから。

大急ぎで服を着て、使い捨ての歯ブラシで……うあ、頬っぺに赤い筋が残ってる。お湯を出して、タオルを濡らして、ぺちぺちとマッサージ。

うん、目立たなくなった。手首にも洗濯ロープの跡が残っているけど、制服の半袖では隠せないけど……時間が無い。

洗面所から出ると、誰もいなかった。大慌てで制服に着替えて食堂へ行った。

誰とも顔を合わさないようにうつむいて、みんなのペースに合わせて、ご飯を食べた。盛大なアクメでエネルギーを消費したせいか、やたらと食欲があった。ご飯が、無駄においしかった。

エネルギーを補給すると、気力も甦ってきた。なぜ、あんなことをしたのか、美沙を問い詰めてやる——つもりだったけど。

部屋に戻って、とっ散らかってる荷物をバッグに詰めてるとき、美沙のほうから近寄ってきた。

「小島先輩には、淫乱な非処女なんか釣り合わないね。さっさと別れちゃいな」

あああっ……これだ！

ピンときた。大地先輩に告って玉砕した子は何人もいたけど、美沙もそのひとりだったんだ。だから、あたしに嫉妬して……。

「ダメです！」

とっさにあたしの口から出た言葉は「イヤ」じゃなくて「ダメ」だった。

「大地先輩が一学期に成績を落としたのは、あたしのことばかり考えてたせいですが。でも、あたしとお付き合いするようになって、急回復してるんですよ。高沢さんは、先輩の受験を邪魔したいんですか」

一気にまくし立てた。けど……なんで、美沙に敬語を使ってるんだろう、あたし。

美沙の顔が引き攣った。痛いところを突かれたってのもあるだろうけど、まさかみんなにも聞こえるような大声で言い返されるとは思ってたんだろう。

美沙はあたしをにらみつけて、無言で自分の荷物を抱えて部屋から出て行った。